

書 評

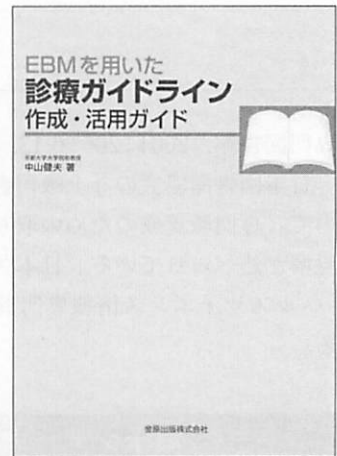
『EBMを用いた診療ガイドライン 作成・活用ガイド』

中山健夫／著

東京 金原出版

2004年5月7日発行

B5版 106p 定価 2,800円



以前、診療ガイドラインの作成に関わった際に言われたことだが、科学的根拠（エビデンス）に基づいて「診療ガイドライン」を作ることと「エビデンス集」を作るとは異なる。網羅的な情報検索とそれらの評価が中心である後者はコストや労力の範囲内での技術的・科学的な作業が主であるのに対して、前者ではそれらに加えて実際の診療行為に関する「勧告」まで盛り込む必要があり、多分に政治的な調整や判断が必要とされる。要するに、診療ガイドラインは使われなければ意味がなく、しかも作成・改訂のための労力に比べてその有効期限は極めて短いという特徴がある。

本書は、このような診療ガイドラインの作成に関わってこられた中山健夫氏によるもので、いわば「ガイドラインのためのガイドライン」である。同様のガイドラインは国内では福井次夫氏らによるものがあるほか、海外にも多数存在する。上記のような作業の特殊性から実際にはそれらを参照しただけでは、なかなかうまくいかないことが多い。本書の著者は、国内外の類書を参考にしながら、自らの経験を基に、わが国における実際の診療ガイドラインの作成に役立つような内容になるように努め、さらにはその活用・普及も視野に入れている。例えば、わが国ではまだまだ誤解の多い Evidence-based Medicine (EBM) や診療ガイドラインに関する概念やこれまでの経緯などを整理したり、Q&A の形でわかりやすく解説を行っている。このあたりに著者の苦労や経験がよく活かされていると思う。また、診療ガイドラインの作成に止まらず、後半では関連トピックスの紹介もあり、日本医療機能評価機構の Minds などの国内での動きや、さきの「エビデンス集」と「診療ガイドライン」の違いを含む海外での診療ガイドラインに関わる評価や反応なども紹介されていて、より多角的に診療ガイドラインというものを考えることを可能にしている。

診療ガイドライン作成のための文献検索に関する解説も要領よくまとまっていて、利用者がこれを見た上で図書館員に質問に来たら、どれだけ適切に対応できるだろうかといささか心配になるほどである。これは脅かしではなく、著者はわざわざ文字の色を変えて「EBM の知識のある図書館員の支援を受けることが望ましい」と強調し、具体的に近畿病院図書室協議会や病院図書室研究会などへ相談することを住所・電話番号付きで勧めている。これだけ過大な期待を受けている以上、受けて立つのが“司書魂 (Librarianship)” というものであろう。そのためにはぜひ目を通しておきたい1冊である。

「ガイドラインなんて初めて聞いたわ」という若手の方はもとより、「以前は代行検索で鳴らしたもののよ」というベテランの方にも現代の情報サービスの形の一つとして、参考になるものとご一読をお薦めする。
(文責：阿部 信一／東京慈恵会医科大学医学情報センター)